

研究ノート：クルト・ゲルシュタインの「自白」
—アンリ・ロックのテキスト・クリティークから—

加藤 一郎

Studa noto: La 'Konfeso' de Kurt Gerstein
—el la teksta kritiko de Henri Roque—

KATO Iĉiro

La Holokaŭstistaj historiistoj rigardas la 'Konfeson' de Kurt Gerstein kiel unu el la plej gravaj dokumentoj, kiuj provas la kriminarojn de Naciista Germanio, precipe, la 'gasajn ĉambrojn'. Sed, la franca studanto Henri Roque atente teksto-kritikis tiun 'Konfeson' kaj eltrovis multajn kontraŭdirojn kaj malrealacon en tiu 'Konfeso'. Li estis donita doktoreco de Nanta universitato favore al sia studo. Ofendigite de la revisionistaj opinioj en lia studo, la Holokaŭstista premanta grupo devigis la francan registaron nulligi lian doktorecon.

Enhavo: <Kurt Gerstein kaj lia 'Konfeso'>

<La afero de Henri Roque>

<La teksta kritiko de Henri Roque>

<konkludo>

<クルト・ゲルシュタインと彼の「自白」>

ナチス・ドイツの殺菌消毒担当SS将校クルト・ゲルシュタイン (Kurt Gerstein) の「自白」は、戦後のホロコースト研究のなかで、ナチス・ドイツによるガス処刑についての「加害者」側からの「目撃証

言」として、もっとも重要な「犯罪証拠」のひとつとされてきた。例えば、我が国でも邦訳されているワルター・ホーファーの『ナチス・ドキュメント』¹では、彼の「自白」は、「毒ガス集団虐殺に関する目撃者の報告」という表題を与えられて、アウシュヴィッツ所長ヘスの「自白」とともに、ガス処刑を「立証する」重要史料として、引用されているし、ホロコースト派の大御所ヒルバークの『ヨーロッパ・ユダヤ人の破壊』も彼の「自白」を再三引用している。²

とくに、彼の「自白」は、文書資料や物的史料にきわめて乏しいベルゼク、ソビボル、トレ布林カといったいわゆる「ラインハルト作戦」収容所に関する貴重な資料とされている。1961年にイエルサレムで開かれたアイヒマン裁判でも、『フィガロ』紙の記事が、「問題とされた第三の絶滅収容所、すなわちルブリンとレンベルクのあいだにあるベルゼク収容所に関しては、第二次大戦の終了時にはわずか一人の生存者しかおらず、その彼もすでに死んでいる。検事側が立証の根拠としたのは、クルト・ゲルシュタインが連合国の将校に提出した宣誓供述書であった」³と述べているように、彼の「自白」は重要証拠とされた。また、「ラインハルト作戦」収容所を研究したYitzhak Aradも、ゲルシュタインに1章をあて、彼の「自白」は「ラインハルト作戦に関する最初で最も重要な史料の一つであった」と記している。⁴

このように、ゲルシュタインの「自白」は、戦後の戦争犯罪裁判やホロコースト研究において、ガス処刑を「立証」する最も重要な資料とされてきた。では、このゲルシュタインとはどのような人物であり、そして、彼の「自白」は戦後どのように扱われてきたのであろうか。後述のロック論文巻末補足「クルト・ゲルシュタイン：彼の生涯、彼の死、彼の『自白』」に従って紹介しておこう。

・誕生から第二次大戦まで

1905年：ヴェストファリアのミュンスターで生まれる。

1921－25年：ベルリンで中等教育を継続・終了。

1925年：福音青年運動と大学聖書サークルに加入。

1925－31年：鉱山の仮採用訓練生、マールブルク、ベルリン、アーヘン高等技術学校生。

1931年：技師資格（鉱山と化学）試験合格。

1933年5月：ナチス党入党。

1933年10月：突撃隊入隊。

1935年1月：ハーゲンの劇場で、戯曲「ヴィッテキント」がヒトラーの権力獲得2周年を記念して上演されたが、それに対して、ゲルシュタインは異議を表明。

1935年11月：鉱山助手試験に合格。

1936年：ザールの鉱山につとめながら、戯曲「鉱山労働者の日々」を制作。上演招待状には、狂犬と伝染病患者のために確保されている列車の客室に関する話が挿入されていた。疑念を抱いた警察が彼の家を家宅捜索したところ、ドイツ全国の著名人に発送予定の宗教的色彩を持った扇動パンフレットが発見された。

1936年9月：逮捕、投獄。翌月、釈放。

1936年10月：反国家活動の咎でナチス党を除名。

1936年12月：チュービンゲンで医学の勉強を始める。

1937年：ドイツ帝国の領内で公に話すことを禁止される。

1938年7－8月：二回目の逮捕。ヴェルツハイムの収容所に収容。

1938年9月：君主主義的な陰謀に関与した咎の調査が開始。

<まとめ>

①のちの殺菌消毒担当将校の下地となる鉱山、化学の教育・技術を習得していること。

- ②戯曲を制作するなど多彩な能力を持っており、強い宗教的な関心を抱いていること。
- ③ナチス党に入党したものの、その体制に批判的であり、除名されていること。
- ④反体制的な見解、活動により逮捕・投獄されていること。

・第二次大戦中

1941年3－5月：志願兵としてSSに入隊。

1941年6月：武装SS衛生学研究所に赴任。

1941年11月：SS中尉に昇進

1942年1月：「公衆健康・技術」局長に任命。

1942年6月8日：ポーランドのベルゼク収容所に青酸防虫剤（チクロンB）を輸送する命令を受ける。

1942年8月17－20日：ルブリンのマイダネク収容所でSSのグロボクネック将軍と会う。ベルゼクとトレブリンカの収容所を訪問。

1942年8月20日：ワルシャワ・ベルリン間の列車で、ベルリン駐在のスウェーデン外交官オット男爵と会う。

1943年4月：SS大尉に昇進。

<まとめ>

- ①チクロンBを使った殺菌消毒の専門家であったこと。
- ②東部地区の収容所、とくに、資料の乏しい「ラインハルト作戦」収容所を訪問していること。
- ③大戦中期から末期までの行動についてはほとんど情報が無いこと。

・敗戦および「自白」の執筆、「自殺」

1945年4月：ドイツ軍を逃亡してフランス第一軍に投降。

1945年4月26日－5月6日：ロットヴェイルのホテル・モーレンに逗留、「特権的囚人」の地位を享受。ここで、「自白」を執筆。

1945年5月5日：ホテル・モーレンで二人の連合国尋問官に会い、フランス語でタイプされた4月26日作成の「自白」、チクロンBに関するデゲシュ社の送付状、英語の短いメモを手渡す。

1945年5月26日：戦争犯罪調査局によって、パリに移送。

1945年6月26日：戦争犯罪調査局でBeckhardt司令官によって尋問。

1945年7月5日：パリの軍刑務所に投獄、殺人と共謀によって起訴。

1945年7月13日、19日：パリ軍事法廷のMathieu司令官によって尋問。

1945年7月20日：独房に拘禁。

1945年7月25日：独房で首をつっているのが発見される。

1945年7月31日：法医学研究所で検死、自殺との判断。

1945年8月3日：墓地に埋葬。

<まとめ>

- ①ドイツの敗戦直前にフランス軍に投降したこと。
- ②フランス軍によって「厚遇」され(?)、自発的に「自白」を作成・提出したこと。
- ③戦争犯罪を追求されると、「自殺」したとされているが、彼の死をめぐる正確な状況は不明であること。

・「自白」の処遇

1945年10月10日：Mathieu司令官は、「自白」の二つの封印封書を作成した。一つにはオリジナル資料、もう一つには、各々の4つの写真コピーが入っていた。

1945年11月10日：軍事法廷局は、ゲルシュタイン文書をロンドンの戦争犯罪委員会のフランス代表に送った。その後おそらく、ワルシャワに送られたが、ほぼ26年間、このファイルは姿を消したという。

1946年1月：1945年4月26日にフランス語でタイプされた「自白」

(T II) が、PS-1553資料として、ニュルンベルク裁判のアメリカ文書の中で発見された。アメリカ人は、この資料をそのまま見過ごしてしまったが、フランス側の主張で、「自白」につけられていたチクロンBの送付状だけが裁判で利用された。

1948年6月：ゲルシュタインの未亡人がはじめて夫の死を知らされる。死の状況や埋葬地などの情報はまったく彼女に伝えられなかった。未亡人への調査報告には「不幸なことに、繰り返し調査したにもかかわらず、ご主人の死亡の状況については知ることができませんでしたし、埋葬地の場所を特定することもできませんでした」⁵ とある。

1950年：チュービンゲンの非ナチス化裁判所は、ナチスのゲルシュタインの復権を拒絶。

1951年：Leon Poliakovの*Le Bréviaire de la Haine*の中にはPS-1553 (T II) からの抜粋が引用されているが、ロックによると、重大な誤りと歪曲が含まれているという。

1954年4月：ドイツで、Hans Rothfelsが*Vierteljahreshefte für Zeitgeschichte*誌に、1945年5月4日付のドイツ語で書かれた「自白」のテキスト (T III) を発表。彼は、削除をおこなったこと、また、目撃証言とは分類されない、すなわち「伝聞情報」とみなされる8頁半の付録を掲載しなかったと読者にことわっている。

1955年：Leon Poliakovは自分の著作*Das Dritte Reich und die Juden*にドイツ語版のテキストを再掲載。*Le III^{me} Reich et les Juifs*と題するフランス語版は1959年に出版される。ロックによるとこのドイツ語版には、翻訳ミスにとどまらないオリジナル・テキストの歪曲が含まれているという。

1960年：Leon Poliakovの著作*Bréviaire de la Haine*の再版。ロックによると、掲載されたPS-1553 (T II) は1951年版よりも信用で

きないという。

1961年：PS-1553（T II）がイエルサレムでのアイヒマン裁判で使われる。

1961年：Paul Rassinierが*Ulysse trahi par les siens*を出版し、ゲルシュタインの「自白」の内容に初めて疑問を呈した。

1962年：ドイツ人Rolf Hochhuthが、彼の戯曲*Le Vicaire*なかで、ゲルシュタインに重要な役割を与え、ホロコーストに対するローマ教皇ピウス12世の戦時中の姿勢を攻撃した。

1962年：Paul Rassinierが*Le véritable procès Eichmann ou les vainqueurs incorrigibles*を出版し、Leon Poliakovによるゲルシュタインの「自白」の取り扱いについてを問題とした。

1964年：Saul Friedländerが*Pie XII et le III^eme Reich*の中で、ゲルシュタインをバチカンを攻撃する証拠として使った。

1964年：Paul Rassinierが、*Le Drame des Juifs européens*の中で、Leon PoliakovによるPS-1553（T II）の二つのテキストを比較・検討した。

1964年：Helmut Franzが、自分の友人であったクルト・ゲルシュタインについての本をドイツで出版。

1965年：Paul Rassinierが*L'Operation "Vicaire"*の中で、再度、ゲルシュタインの話は信用できないと述べる。

1965年：将来のドイツ首相Kurt Kiesingerがゲルシュタインの名誉を回復した。

1967年：Saul Friedländerが、*Kurt Gerstein ou l'ambiguité du Bien*を出版。

1969年：Pierre Joffroyが*L'Espion de Dieu/La Passion de Kurt Gerstein*を出版。

1971年8月3日：フランス外務省が、1945年11月に姿を消したのちに再発見されたゲルシュタイン文書を軍事裁判所に返還。しかし、不完全なものであり、彼の死後に発見された資料を入れた二つの封印封書は消えているという。

1979年2月21日：【ル・モンド】紙にヒトラーの絶滅政策に関する34人の歴史家の声明文を起草したLeon Poliakov、Pierre Vidal-Naquetは、「自白」(TⅡ)の抜粋を声明文に挿入した。

1979年3月8日：2月21日の声明文に対して、読者から、ゲルシュタイン「報告」によると700-800名が25平方メートルのベルゼクのカムフラージュ室に押し込まれたとなっていることに疑問を表明する手紙がよせられていたことに対し、Leon Poliakov、Pierre Vidal-Naquetは、ゲルシュタインの「自白」には、正確さを欠く箇所があるとしても、その「本質部分に関して異議のないもの」と信じていると回答。

1982年9月：François de Fontetteは彼の*Histoire de l'antisémitisme*中で、1945年5月4日付の「自白」(TⅢ)を引用しているが、ロックによると、ガス処刑作業に関する部分が削除されているという。

1983年：Israeli Yizhak Aradが、「自白」についての論文を論文集*Massentötungen durch Giftgas*に寄稿し、1945年5月4日付の「自白」(TⅢ)を部分的に引用しているが、ロックによると意図的な削除が行われているという。

<まとめ>

①ゲルシュタインの「自白」には数版あること。ロックの研究によれば、1945年4月26日のフランス語の手書きのテキスト(TⅠ)、1945年4月26日のフランス語でタイプされたテキスト(TⅡ)、1945年5月4日のドイツ語でタイプされたテキスト(TⅢ)、1945年5月6日のフランス語の手書きテキスト(TⅣ)、1945年5月6日のフ

ランス語でタイプされたテキスト、「チュービンゲンのゲルシュタイン博士の報告」という表題を持つもの（TV）、1945年5月6日のドイツ語でタイプされたテキスト（TVI）の六つの版と、TVの二つのヴァリエントTV a、TV b、その英訳TV cがある。このうち、ニュルンベルク裁判資料PS-1553として提出された1945年4月26日のフランス語でタイプされたテキスト（TII）がもっとも一般的であり、各国語に翻訳されていること。

- ②ゲルシュタインは、反ナチスの傾向とナチスの犯罪の「自白」のおかげで、名誉回復されていること。
- ③ゲルシュタインの「自白」は、ガス処刑を立証する重要資料としてホロコースト派の歴史家たちにしばしば引用されてきたが、部分的あるいは不完全に引用されており、しかも、「自白」全体の信憑性に疑問を提起するような「不正確」な箇所あるいは「誇張された」箇所は、意図的に削除、すなわち一般の読者から隠されてきたこと。

<アンリ・ロック（Henri Roques）事件>

1986年、いったんは認められた博士号が、その後否定されてしまうという、フランス高等教育史上ユニークな事件が起こった。アンリ・ロック事件である。

事件の発端は、当時60代後半のフランス人農学者アンリ・ロックが、SS将校クルト・ゲルシュタインの「自白」に対する史料批判をまとめた研究論文を学位請求論文としてナント大学に提出したことであった。彼の学位請求論文は、アウシュヴィッツ収容所長ドルフ・ヘスの「自白」とともにガス処刑に関する重要資料とされてきたゲルシュタインの「自白」には様々な矛盾が存在すること、また、戦後のホロコースト派の多くが自説を裏付けるために、彼の「自白」の一部を、削除や意識と

いった手段で意図的に史料操作してきたことを明らかにしていた。

フランスでは、学位請求論文が提出された場合、まず3人の審査員が選ばれ、ついで、審査員も参加する公聴会が開かれ、口頭試問が行なわれたのち、学位請求が認められる。のちに英訳されて公刊されたロック論文⁶に序論を寄稿しているRonald V. Percivalによると、ロックの請求手続きも、この正規の手順を踏んでいた。まず、ロックは、学問上の公正をきすために、ホロコースト派のPierre Vidal-Naquetを招請しようとした。しかし、彼が拒否したために、Jean-Paul Allard（近代ドイツ史の専門家）、Jean-Claude Riviere（ロックの指導教官、文献分析の専門家）、Fr. Pierre Zind（近代史の専門家）の3名が審査員となった（のちに、ホロコースト派は、3名をいずれも「右翼の見解」の持ち主として非難することになる）。ついで、約40名が参加する公聴会が開かれた（のちに、ホロコースト派は、この公聴会が秘密裏かつ性急に開かれたと非難することになる）。以上の手順を踏んだ結果、1985年6月15日、ナント大学は、ロックの学位請求を認め、彼に博士号を授与した。

たしかに、ロック論文はホロコースト「正史」を批判するホロコースト修正派的な結論を下しているので、ホロコースト派からすれば、当然批判の対象となるはずであるが、その批判は、本来ならば学術論争として展開されるべきであろう。ところが、翌86年春から、マスメディアを中心として、ロック個人とその論文に対する非難と中傷が始まった。この批判と中傷は、論文に対する学術的な批判ではなく、ロックはナチス・ドイツを弁護しようとしているとか、彼の指導教官かつ論文の審査員であったJean-Claude Riviereは「Europe Actionと呼ばれる極右組織のメンバーである」⁷ といった、他のホロコースト修正派に対する攻撃キャンペーンと同様のものではなかった。

このようなキャンペーンの圧力を受けたフランス政府は、ロックの学

位審査と授与に関する再調査を指示し、論文の学術的な内容ではなく、審査と授与の過程での瑕疵を理由に⁸、1986年7月、学位の請求を認められた85年6月15日の決定を無効とした。

では、ロック論文は、どの点でホロコースト派の「逆鱗」に触れたのであろうか。

<ロックのテキスト・クリティーク>

・「ラインハルト作戦」収容所と犠牲者の数

「1）ベルチェック、ロウブリン（ルブリン…引用者）ーレンベルクルート途上で、ロシアとの国境に近い区域にある。最大一日15000名。（見た！）

2）ソビボル、正確にどこにあるか知らない。見ていない。一日20000名。

3）トレ布林カ、ワルシャワの北北東120キロメートル。一日に25000名。見た！

4）マイダネク、ロウブリンの近く、準備中を見た。」（T II）

ゲルシュタイン自身がこれらの収容所のうちどれを実際に目撃したのかについては、テキストによって異同がある。問題なのは、その犠牲者の数である。ロックは、ゲルシュタインのあげている犠牲者数に各収容所の存在期間＝稼働日数を掛けて、最小と最大の犠牲者数を算出し（ベルゼク：最小=3080000人、最大=5475000人、ソビボル：10600000人、トレ布林カ：最小=6075000人、最大=11250000人、合計：最小=23770000人、最大=31525000人）、合計2500万を越えるような非現実的犠牲者数を批判している。ちなみに、ヒルバーグは『ヨーロッパ・ユダヤ人の破壊』のなかでは、ベルゼク：550000人、ソビボル：200000人以下、トレ布林カ：750000人以下、という数字をあげており⁹、ツ

ンデル裁判では、「収容所の最大限の能力に関する部分はありませんでした」⁹と証言している。

・ヒトラーとヒムラーのベルゼク収容所訪問

「8月15日に——昨日のことである——ここに滞在した総統とヒムラーは、施設を見学しなくてはならない人々すべてに私が個人的に同行するように命じた。」(T II)

1942年8月15日にヒトラーとヒムラーがベルゼク収容所を訪問したという事実はない。ホロコースト派は、この部分が、SS将軍グロボクネックの会話からの引用であることを根拠にして、この話はグロボクネックの「法螺」であると主張しているが、ロックは、ゲルシュタインがベルゼクの他のSS関係者と話をすれば、「法螺」はすぐ露見してしまうのであるから、話全体がゲルシュタインの「作り話」であるとしている。

・靴紐を配る少年

「4歳のユダヤ人の少年が、靴を結びあわすために短い紐を配っていた。」(T II)

ロックは、一人の少年が約5000名の移送者に、靴紐を配っていたことになると、この情景の非現実性を批判している。また、Leon Poliakovは、この箇所を削除しているという。

・犠牲者の靴の山

「たっぷり25メートルの高さになった靴の山では…」(T II)

犠牲者の靴の山に関する証言であるが、「35-40メートルの高さ」と述べているテキストもある。ロックは、ビル7-8階あるいは10-12階の「高さにまで登って、いったいどのようにして靴を積み上げることができるのだろうか」¹¹と批判している。

・狭い「ガス室」に押し込まれた大量の犠牲者

「面積25平方メートル、空間45立方メートルのなかに700人から

800人！SS隊員が【物理的な最大限まで】押し込んだのだ。」(T II)

ゲルシュタインの「自白」のなかでも、とりわけ非現実的(1平方メートルあたり30人)と批判されている箇所である。ロックは、この非現実的な数字に困惑したホロコースト派の研究者が、この数字を削除したり、あるいは、Leon Poliakovが25平方メートルを93平方メートルと置き換えたように、数字を恣意的に改竄してきたことを指摘している。ヒルバーグはツンデル裁判のなかで、この箇所に関して、「この特定のデータについては私はとても慎重です。ゲルシュタインはとても興奮しやすい人物であったからです」、「自分の本の中では、この箇所は無視しました」、「この話がまったく馬鹿げたものであるとは考えていませんが、この箇所を受け入れていません」¹²と証言している。

・ディーゼル・エンジンの排気ガスを使ったガス処刑の様子

「ヘッケンホルトは、ディーゼル・モーターの運転手で、【ちょっとした技師で、同時にこの施設の建設者であった。】ディーゼルの排気ガスで人間を殺すわけであった。SS下士官ヘッケンホルトはディーゼルを始動させようとした。しかし、ディーゼルは始動しなかった！ヴィルト隊長がやってきた。彼は私が立ち会っている今日に限って、そんなことになったのを苦にしているようだった。実際、私はすべてを理解したのである！私は待っていた。私のストップウォッチは【活発に】すべてを記録していった。50分たち70分たったが——ディーゼルは始動しなかった！人々はガス室の中で待たされていた。いたずらに時が経った。彼らが【シナゴグでのように】と泣いているのが聞こえた。【彼らが泣いたり、しゃくりあげたりするの聞こえた。】マールブルク／ラーン大学衛生学卒業生でSS少佐プファンネンシュティール教授博士が木の扉に耳をつけながら

言った。ヴィルト隊長は怒って、【ディーゼルの傍らで】ヘッケンホルト【下士官】を手伝っていたウクライナ人の顔を乗馬鞭で、11、12回【12、3回】打った。2時間49分して——ストップウォッチが正しく記録していた——ディーゼルが始動した。その瞬間まで、この4つの部屋で45立方メートルの4倍の空間に750人の4倍の人数が生きていたのである！……

それから25分がすぎた。まさしく多数の人が死んでいた。小窓から覗くと、電灯の光が部屋を一瞬照らして、それが判った。28分してもまだほんの何人かが生きていたが、32分後には全部死亡していた！」(T II)

ディーゼル・エンジンの排気ガス（主として二酸化炭素）が、大量ガス処刑にとって「効率的」な手段であるかどうかは、ホロコースト論争の論点の一つである。この論点は別として、ロックが指摘しているのは、ホロコースト派の研究者によって「興奮しやすい性格」とされているゲルシュタインが、このガス処刑の箇所では、ストップウォッチを使ってきわめて「冷静」にガス処刑の様子を「克明に」記録していることである。さらに、この「克明な」記録にも、700-800名の犠牲者が45立方メートルの空間で酸素不足で窒息せずに、ディーゼル・エンジンが作動するまでの「2時間49分」のあいだ、どのようにして生き続けることができかの、また、おそらく立錫の余地もない「ガス室」を「小窓から覗いて」、ガス放出「25分後」、「28分後」、「32分後」にどのようにして死者と生者を見分けることができたのかという非現実的な矛盾が存在しているという。

・ベルゼク、トレ布林カでの犠牲者数

「ベルチェックでもトレ布林カでも、死人について記録したり、その人数を数えたりする労は省かれていた。【人数は貨車何両分と

【のように数えられたのみであった。】イギリスの放送局（BBC）の数字は正確ではなく、本当は、全部で2500万人であろう。」

ロックが、「unbelievable」と形容する「2500万」という数字については、ヒルバーグも、ツンデル裁判のなかで、「2500万人が殺されたという箇所は『レトリック』であると考えて、『絶対』『明らかに』使いませんでした」¹⁹と証言している。

・テレジエンシュタット収容所での戸外での青酸による処刑

「別のとき、ギュンターは、マリア・テレジエンシュタットの周りをめぐらした堀のなかで大量のユダヤ人を戸外で殺すことが可能かどうか私に相談した。私はこの悪魔的な計画を妨害するために、この方法は不可能であると述べた。のちに私は、SDはテレジエンシュタットでこれらの哀れな人々を殺すために、別の方法で青酸を手に入れたことを耳にした。」（TⅢ）

揮発性の青酸ガスを「戸外」での大量殺人に用いることは化学的にも不可能であるが、ロックによると、ゲルシュタインの「自白」では、伝聞情報ながらも、これが実行されたことになっている。

・様々な処刑方法

「例えば、道路のアスファルトのためのコンプレッサーを利用して、ボイラーのなかで圧縮空気によって人々が殺された。」（TⅣ）……

「ポーランドでのもう一つの殺人方法は、人々を溶鉱炉の階段のてっぺんにまで登らせて、ピストルで殺害したのちに、炉のなかに投げ込むというものであった。」（TV a）……

「アウシュヴィッツだけでも、数百万の子供が鼻の下に置かれた青酸のパッドによって殺された。」（TV a）

大戦中から、ユダヤ人その他の処刑方法については、様々な噂が流れていたが、今日では、「ガス処刑」を除いて、大半が「噂」か戦時中の

「宣伝」にすぎなかったとみなされている。ロックによると、ホロコースト派の研究者は、このような箇所を「伝聞情報」として、引用から削除しているという。ヒルバーグもツンデル裁判では、「青酸パッド」については「自分の本では引用しなかった」¹⁴と証言している。

・ラーフェンスブリュック収容所での人体実験とオラニエンブルク収容所でのホモ・セクシャルの処刑

「私はラーフェンスブリュック強制収容所での生体実験に立ち会った。この実験は、SS中將のGerhardt Hohenlychen博士教授の命令で、SS大尉Gundlach教授によって行われた。」(TV a)

「私は、ある日、オラニエンブルクで、数百の、否、数千のホモ・セクシャルが炬のなかで跡かたもなく消え去ったのを目撃した。」(TV)

ゲルシュタインは「立ち会った」とか「目撃した」という表現を使っているにもかかわらず、ロックによると、ホロコースト派の研究者は、この箇所を「伝聞情報」として、引用する場合には、削除しているという。

<終わりに>

以上のようなロックのテキスト・クリティークを踏まえた上で、我々は、ホロコーストに関する最重要資料の一つとして扱われてきた（現在も扱われている）ゲルシュタインの「自白」にどのように対処すべきなのであろうか。ロック論文に「あとがき」を寄せているPercivalは、次のように述べている。

「もしゲルシュタインが歴史的な関心をひく人物として今後も関心の対象となるとすれば、それは、彼がナチスの虐殺を暴露したためではなく、彼の証拠が価値のないものであるためであらう。彼が今後も関心の

対象となるのは、彼は一連の驚くべき嘘を作り上げたためであり、かくも長い期間にわたって、人々を騙し続けることに成功したためであろう。」¹⁵

-
- 1 ウルター・ホーフナー著 救仁郷繁訳『ナチス・ドキュメント』、ベリカン社、1982年。
 - 2 『ヨーロッパ・ユダヤ人の破壊』の初版（1961年）で『自白』を頻繁に引用していたヒルバーグは、ツンデル裁判で、その取り扱いについて批判を受けたのち、1985年の第二版では、「自白」からの引用をかなり少なくしている。R.Hilberg, *The Destruction of the European Jews*, NY., London, 1985. ラウル・ヒルバーグ、望月その他訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』（上）（下）、柏書房、1998年。
 - 3 Paul Rassinier, *The Holocaust Story and the Lies of Ulysses*, California, 1978. p.250.
 - 4 Yitzak Arad, *Belzec, Sobibor, Treblinka: The Operation Reinhard Death Camps*, paperbaback version, Indiana, 1999, p.102.
 - 5 Paul Rassinier, op.cit., p.251.
 - 6 Henri Roque, *The 'Confessions' of Kurt Gerstein*, California, 1989.
 - 7 *Hitler's Apologists: The Anti-Semitic Propaganda of Holocaust "Revinionism"*, 1993, N.Y., p.43.
 - 8 ホロコースト派によると、ロックの学位請求をめぐる手続き上の瑕疵は、「第一に、ロックは、学生登録の締め切りの三ヶ月後の1985年3月に、大学の学部長の許可なく、パリ大学からナントに移った。第二に、彼は、文学あるいは歴史の論文を提出するのに必要な資格や称号を持っていなかった。第三に、資格口頭試験は行われなかつ

た。第四に、彼が論文を書いたのは、最小の登録期間である2年間ではなく、2ヶ月であった。最後に、論文発表のときに出席していたといわれている審査員のうちの一人の署名は偽造であった」というものであった。ibid.,p.43.もちろん、ホロコースト修正派は、これらを言いがかりとしている。

- 9 ラウル・ヒルバーク、望月その他訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(下)、408頁。
- 10 *Did Six Million Really Die ? Report of the Evidence in the Canadian "False News" Trial of Ernst Zundel-1988*, edited by Barbara Kulaszka, Toronto, 1992, p.37.
- 11 Henri Roque, op.cit.,p.149.
- 12 *Did Six Million Really Die ? Report of the Evidence in the Canadian "False News" Trial of Ernst Zundel-1988*, pp.31-33.
- 13 Ibid.,p.33.
- 14 ibid.,p.34.
- 15 Henri Roque, op.cit.,p.175.